

展景

季刊

No.118



Summer 2025

目次

桜〈短歌〉	……………	小野澤繁雄	4
「亜鉛の少年たち」開けぬうちにまた戦争〈俳句〉	……………	新野祐子	6
地藏まつり〈短歌〉	……………	布宮慈子	8
足長女〈短歌〉	……………	梅津純子	10
晩春〜初夏〈短歌〉	……………	大橋千佳子	12
〈那須通信 63〉はなしはこんなところへ	……………	加藤文字	14
〈薫風颯々 37〉春待つ庭と畑から	……………	神村ふじを	18

対詠（こぼげんいか） PART 94	……………	小野澤／河村／布宮	22
前号作品短評A	……………		24
前号作品短評B	……………		27
無二の会短信	……………		32
編集後記	……………		36

今号のイメージ／ライ麦

桜

小野澤繁雄

何の折ということもなく東口人垣なかにアルタみあげて

うちとけて女男^{めお}であること先にきてグラントゴルフ準備の者ら

幼木の頃までをしる桜たちその生長もみておくごとし

水槽の大きさからか育ちしはおおきな魚^{うお}に金魚もふくむ

境内のなかでのことに移されてベンチの位置は桜みる位置

三十年このまちに住みなおも住み四月のそらにみる鯉のぼり

吠えられることもまだあるゴンちゃんしって間ない間やまださん家^ちに

アンブレラ日傘のひとはコスプレか桜堤が背景になる

いきもどりすることになる桜堤下道とれば菜花が間

傘が揺れ揺れることでもイラストは降り方までをみせて予報は

「亜鉛の少年たち」開けぬうちにまた戦争

新野祐子

泣き伏すはふるさとの庭土匂う

蚊の尿しとの音ほど繊細政治とは

永遠を相手に戦闘若駒ら

墓碑に記す英雄の文字草朧

雀の子あげた玩具を齒で掴み

陽炎や地雷を踏めばみな肉片

無傷で帰れど心は粉々つばくらめ

ドキュメンタリー小説って春の空気感

民草が民草訴え鐘霞む

ひこばゆる己の暗愚知った時

地藏まつり

布宮慈子やすこ

宿用院の地藏まつりに誘はれておつかかなびつくりバザーを開く
ひなまつり、収穫祭のバザーなら経験あれど地藏まつりとは
歌と踊り、バンド演奏あるといふ 焼きそば、煮込み、ラムネの店も
縁日のやうなものかと考へてこども食堂のためのバザーを

若き僧三人みたりが地藏に経を上げいつしかわれも手を合はせたり
御詠歌の八人集の声ひびき鈴れいを振りつつ友が歌ふも

雨予報はづれて外の行事みな盛んになれば集まりくる人、人
大黒舞、日舞とフォークソングあり高校生のバンドは過激

本尊の前なる僧侶三人のバンド The Zen (ザ・ゼン) のロックに驚く
「活気のある寺！」と言ひしはヴォーカルの僧の挨拶われも思ひぬ

足長女

梅津純子

誰もぬ河原の畑に草引くに煮物の匂ひにはかに迫る

町並みは堤防の彼方風も無き河原に漂ふ料理香は何故

友よりの種芋三種キタアカリ、メークイン、また男爵よろし

じやが芋の三種の花の色違へ咲くを心に土被せゆく

雉鳴くに眼上ぐれば真つ赤なる夕日輝く遠き日のごと

夕日背に歩む吾が影八メートル怖いもの無き足長女

立ち枯れか更紗サラサド満天星ウダンの白き幹草花の庭に兀然こつぜんと立つ

葉裏垂るる米粒ほどの万の花吊り花壇ツリバナマユミの早緑揺るる

朝冷えに昨夜備へたる服替ふる集合時刻迫り来るに

干物のみ鮮魚市場に求めたり初夏のバス旅帰り路遠く

晩春（初夏）

大橋千佳子

黒獅子の竜神様はしぶき上げうねうねと練り巡りゆく

水面よりやおらぬうつと顔上げた！ 民を見下ろし睨みをきかす

隣町の獅子舞のなんとおそろしき赤いお獅子で育った者に

ケバブサンドキッチンカーをチラと見て獅子は街へとうねって行った

猫ほどの足跡花壇を駆け回るクマイノシシの険いかばかり

いそいそとカーテン上げる西の窓今朝の「おはよう」はニホンカモシカ

野生に種の保存意識なしというそれにしてもスギナの侵食

二軍制にしてほしいとぼやきつつパートの響きに耳傾ける

軽快に言葉弾ませ歌うには日々のおときめきあまりに乏し

言い聞かす「自学が大事」と頼りはカシオトーンと拡楽譜

はなしはこんなところへ

加藤文子

ミツバツツジの花後は、実を結ぶ前に花柄^{はながら}を取り除く。どうしてそんなことをするのかと、よく問われる。

開花するには相応のエネルギーが要る。その上、小さな鉢で育っているのに結実させては負担が生じて木が疲れてしまうのではないか、その心配があるので、花柄は取り除くようにしている。

三十年ほど前になるだろうか。育てていたシダの根元から突如芽が現れた。風の仲立ちか、種が着地して発芽したものと思う。成長した姿から、ミツバツツジと判明。

数年のうちに花が見られるとばかり思っていたのだが、それなりの木姿になっても一向に咲く気配がない。咲かぬまま十年、十五年が過ぎていった。

葉脈が透けてみえるようなツツジの新緑、後れて展開するシダの優雅な葉、二つが織り成すフォルムが睦まやかで美しかった。



これで充分、咲いても咲かなくてもどちらでも良いと思っていた。花のことなど忘れていた芽生えから二十年になろうとした春に、枝先に細長い数輪の蕾をみとめる。

花の紫は何とも言えない艶やかな風合いで迎りを明るくした。年経るごとに花数も増えてきた。長いあいだの沈黙は何だったのだろうと思えるほど、本当によく咲いてくれる。

咲かないのがあたり前と思ってきたのが、咲くのがあたり前になった。あたり前が反転した。そうでなかったことが、そうであるようになって続いていく先に、慣れやあたり前の領域がある。

さいたま市で四畳半と六畳と二畳の納戸のある貸屋で暮らした時代。

当時は人の出入りも多く、お昼時になると訪ねてくる知り合いもいて、ごはんを一緒に食べた

り、泊まっっていく友人も多くいた。

所狭しと物を置いた部屋で十人くらいで夕食を共にすることもあった。折り畳みのお膳と小さな

ちゃぶ台を連ねて、食卓にした覚えがある。

狭い台所、外に焚き付け場のある旧式のお風呂、一体どんなふうによりくりして客人を迎えていたのだろう。細かなところが思い出せそうで思い出せない。若さ故か、毎日が新鮮でおもしろかったことは覚えている。

那須に移住して、住まいも広くなり、暮らし向きも変わった。貸屋のころの記憶はうすれ、より

快適になったここでの生活が馴染みあるものとなった。

そういえば、普段夫がしてくれていることも、いつの間にかあたり前のように思っている。そんな自分にはたと、心が留まる。出会う以前や、はじめの頃を忘れそうになる。

コラコラ、そうではないでしょう。感謝の気持ちもネ、と時々自分に教えてあげよう。

ミツバツツジの来歴を書きすすめているうちに、はなしはこんなところに来てしまった。



大きく育った ミツバツツジとシダ

春待つ庭と畑から

神村ふじを

今年は何年よりも雪が多く、五月になっても雪解氷は最上川を淡緑に染めていた。ご多分に漏れず我が家の庭や畑にはだいたい雪が残っていて、連休中には畑に苗物を植えることが通例なのに、地温が低くて十日ほど遅れて畑作業を始めたところであった。

まだ遅霜の心配もあり、キュウリやメロンなど瓜の仲間には寒さに特に弱く、時期を選ぶし、使用済みの肥料袋を被せたりして、寒さ対策には何かと気を遣わなければならなかった。

しかし、春の訪れは身も心も弾んだ心地になる。スプリングとはよく言ったものだ。温泉も発条ばねもスプリング、まさに春の印象を見事な比喻で表現した言葉。その心の持ちようは東西、老若男女を問わずと言ったところであろうか。

「芹薺御形繁縷仏座菘蘿蔔（セリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロ）」が春の七草と呼ばれているが、スズナ（カブ）やスズシロ（ダイコン）は秋野菜として扱わ

れているので別だが、家の周りの野草の類は春の訪れを待っていたかのように咲き始める。

それと同時に山菜と呼ばれる類の植物も芽を出し始める。もつとも早く芽を出すのは意外にもギョウジャニンニクである。その名前のとおり修験の行者が精をつけるために食べたのが名前の由来になっている。中高地の植物であるが故、私の畑のような平地では若干地温が高く雪が消え出すとすぐ芽を出し始める。

このギョウジャニンニクは何十年前も前に勤めていた学校の保護者からいただいた。何でも庄内はあつみ温海の崖に自生していたものだろうだ。

ユリ根のような球が地下にあり、三年目にやっと分球して少しずつ仲間を殖やしていく。全体に軽いニンニク臭がして、おひたしにしても天婦羅にしても、ニンニク代わりに餃子の具にしてもいい。世の中には高級食材として知れ渡っているのに、少し食べたばかりでも優越感に浸ることができさる。

アカコゴミもめつぼう早い。日当たりのよい斜面から一本ずつ次々に出る。キヨタキシダというのが本当の名前のようだが、軸が赤っぽいのでアカコゴミと呼んでいる。

いわゆるコゴミはアオコゴミと言って軸が青く、株から十本ほど固まって出るので違いはすぐ分かる。アオコゴミを本コゴミ、アカコゴミをアブラコゴミとか一本コゴミと呼んで区別している。

山菜として流通しているのはアオコゴミの方が圧倒的に多いはずである。だからこのアカコゴミ

も多く出回っていない分何となく優越感に浸ることができる。

そのほかには、ウド、ウルイ（オオバギボウシ）、アイコ（ミヤマイラクサ）、アカミズ（ウワバミソウ）が家の周りに自生しており、食卓は動物性蛋白質の影が薄れ、四月五月は草を食って生きている感じがする。

さて、今年の春も桜の季節が急ぎ足で過ぎていき、若葉青葉の季節になりつつある。畑には夏野菜の代表格キュウリ、ナス、トマトの苗を植えた。

そのほかにジャガイモ、長ネギ、カボチャ、インゲン、ヤーコン、サツマイモを植え、種物はキャベツ、カリフラワー、ブロッコリー、レタスそしてビール用に枝豆を植えてみた。枝豆は茶豆風味の「湯あがり娘」が人気だが、当方には庄内に「だだちゃ豆」と内陸には「秘伝」というめっぽう旨い豆がある。

「だだちゃ」は「父ちゃん」を意味し、本当かどうか分からないが、「この豆はどこのだだちゃが作ったのか」と酒井の殿様が訊ねたことが由来と言われている。

「秘伝」は内陸地方の特産品。日暮れが早くならないと実入りが悪いという性質があり、六月半ば以後に植えないとよく育たない。暑い時期に生ビールといっしょにはいかない品種だが、粒の大きさといい甘さといい名前に負けない別格の旨味がある。

最近のサツマイモはホクホク系が人気だ。「はるか彼方に安納シルク」と謳われており、はるかには「紅はるか」安納は「安納芋」シルクは「シルクスイート」のことである。中でも紅はるかシルクスイートは群を抜いて旨い。それに苗は驚くほど強い。苗を植え付けると一旦枯れてしまったように見えても、必ず新しい葉っぱを出してくる。この強さが飢饉のときに役に立った強さなのだろう。七十路に足を踏み入れた我が身にとって、かくありたい、かくあらねばと思うサツマイモである。

ホームセンターには様々な苗が並んでいる。苗物の植え付けには適期というものがある。ホームセンターで売っているからといって早めに買って地植えをすると大失敗するものがある。その代表格がオクラである。オクラの原産地はアフリカだそうで、寒さにはめっぽう弱い。実は私はこのオクラは日本原産だと思っていた。何と言っても名前が近所の婆さんのようで、やたら親近感があったのである。この親近感に騙された。

買ってすぐ地植えしたら、一週間もせずに枯れてしまった。それも一回や二回ではない。反省が生きていなくて、ようやくこの頃アフリカ原産であることを知り、六月半ば以降にしか植え付けないことにしたのである。

毎年のことながら畑仕事は経験と失敗と学びの連続である。

小満や隣家の畑をそつと見る ふじを

N K O
小野澤繁雄
河村 郁子
布宮 慈子

鉄線の花はいつしか消えゆけり外水道のそばに咲きしが	5月16日	N
家庭菜園にも盛衰のようなこと人がでていて十番のこる	5月22日	O
家の裏に畑があれば日々育つ空豆、レタス、苺を眺む	5月29日	N
五月にみてこれでいいのかともおもう柏葉アジサイ畑のすみにも	6月4日	O
梅雨入りはしてゐるやうなり山形はあぢさゐの花いまだ咲かねど	6月18日	N
略されてヨーチになったか幼稚園動物ヨーチおやつのひとつ	6月25日	O
熊が出てその話題にて持ちきりのわが町となりの空港までも	7月2日	N

アパートのその一室にすむものかドア開けられている猫がみゆ	7月10日	O
G大阪(ガンバ)との天皇杯の試合ありPK戦の末の勝ち見ゆ	7月16日	N
雨の中みているうちに列になる傘の大きさ中学生ら	7月23日	O
ゴーヤーと甘南蛮と夕顔を持って来る人あり日傘をさして	7月29日	N

サッカー天皇杯3回戦はモンテディオ山形が勝利した

●アラスカの天然ガスがニッポンの不夜城の灯の支えとなるや

大橋千佳子

不夜城の灯(ひ)の、か。アラスカが突然出てきたような。トランプ大統領の大統領令から(一首目)、だが、この歌のようなうけ止め方は、みなかったよう。開発やパイプラインや費用も時間も要する計画である。ニッポンの表記にまた不夜城というところにも批評の眼が感じられる。前半三首がこの話題から。ついで二首が健康問題。

量的に経済的にいけるかな? 日に60グラムの蛋白

日本人の食事摂取基準(厚労省)というものがあり、なかにタンパク質もある。「高齢の栄養不良」問題が直前歌にある。経済的に、というところがいかにも作者か。そのあと二首がたぶん花水木の歌。そのあとこういう歌、ブルガリが出てくる。ブルガリはイタリアのブランド、ここでは香水か。じぶんは、ことしのカレンダーをマティスの絵にした。二月立春、季節の挨拶の歌としてもみてもいい。不思議な生活感がある。

カレンダーのシャガールの絵にブルガリを吹きかけてみる二月立春

●またしても今年二度目の大寒波 日本海より帯状降雪

河村郁子

一連「大寒波」冒頭の歌。今冬に特徴的な寒波。これで春の花の開花も遅れたよう。メディアで天気は今大事なコンテンツになっている。帯状降雪も、日本海寒帯気団収束帯(JPCZ)が、豪雪をもたらすものとして説明される。ここから能登門前町の(華道の)友のことも、思い起こされることになる。関係で、輪島の箸にも及ぶ。また酸ヶ湯の過度の積雪から「北苑」同人が集いし初夏のこと、弘前の同じ年歌人を見舞いたいの、かなわないうとも、など。歌はそれぞれ、その一部、

贈られし輪島の箸を使ひ初む六十年來飾りおきしを

弘前の同じ年歌人を見舞ひたし このそぢには策なし 哀し

初午の寒波さなかに人形町志乃多寿司もて見舞ひてくれる

ここには思いやること、見舞いの文化(の名残)がある。神田にもあるという志乃多寿司、区別して人形町は総本店という、老舗。このそぢには、が作者、身にしみるよう。

●さくらんぼ東根駅ゆ新庄へ在来線に乗りて安らぐ

布宮慈子

さくらんぼ東根駅は、奥羽本線(うち愛称山形線)の駅。さくらんぼ東根駅は新幹線つばさ、の停車駅でもあるので、在来線にと断つたものか。在来線はJRグループの路線で「新幹線」以外の

従来からある路線のこと。「乗りて安らぐ」ものがあるという。一泊の温泉旅行（二首目）の一部である。駅には乗降客の多い駅、少ない駅がある。

中国の人など多く乗りたるに大石田にておほかた降りぬ

おそらくは銀山温泉に行くのだからポスターになりし冬の銀山

何があつてか、降車客が多い。そこでおそらくは、の歌がつづくことになる。このポスターはJRの駅によくみるものの一つ。なだらかな詠い振りがいい。

歌は、継起的に繰り出されて、乗客の時間にそうものになる。ところで、英和辞典を引いても、すぐにはインバウンドにいきつかない。短さ、に使い勝手のよさがあるのか。

運休の続く陸羽東線の代行バスに身を預けたり

多く災害で運休区間をもつ線は東北に多い。奥羽本線、陸羽東線、陸羽西線、米坂線、津軽線である。バスからみえる風景は列車車窓からとまた違う。遠く近くと隈なく眺む、としたところ。旅にはいろいろ気づきがあり、ここでは最上地方の家（の造り）。同じ県内でもある違い。一連、ついでゆく楽しみもある。

屋根の雪すべり落つるやうに造られし最上地方の家しづかなり

前号作品短評B 〈慈子〉

●ワンルームと1Kの違いこれもしるEテレ高校家庭総合に

小野澤繁雄

NHKのEテレで高校講座「家庭総合」という番組があるらしい。調べてみると、「自立ってどういうこと?」「対等な関係ってなんだろう?」「結婚いろいろ…?」などのタイトルが並ぶ。作者は「これもしる」といっているから時々この番組を見るのかもしれないが、ワンルームと1Kの違いを知ったという。知っているようで、知らないことは往々にしてある。改めて考えてみたことを歌にしている。

コンビニに向かっているようこの二人兄と妹であるかもしれぬ

朝のみちそこを縦列に若者ら一人がそれでコンビニに入る

コンビニはすっかり日常に定着しているようだ。若い人たちにとっては、なおさらだろう。朝ごはんを買いに行くのだろうか、その風景としてコンビニを利用する直前を写し取った二首。

冬さればなんのすき間にスガンさんの山羊こども心に恐れ紙芝居

「冬さる」は「冬がやってきたので」の意であろう。冬になると何の加減か「スガンさんの山羊」を思い出すのだが、こども心に恐れた紙芝居であった、という。

フランスらしく、憧れと自由と勇氣とそして自然の掟が描かれ、こどもに媚びないお話のようだ。スガンさんは六頭の山羊を飼ったことがあり、いずれも山の中へ逃げてオオカミに食べられてしまふ。しかし、山羊が好きなのでやはりまた飼うことに。新しく来た山羊もまたしばらくすると遠くの山の存在に気づき、自由を求めてある日小屋を抜け出して単身で山へと行ってしまふ。結末はどうか。やはりオオカミに出会い、一晚中戦い抜くことになる。それぞれ受け止めかたは違ふだろうが、こどもの頃の印象はこのほか強いものだ。

●手にするはまた獄中記嚴冬期

新野祐子

「冬に読む」という題で、獄中記が並ぶ。『死の家の記録』は一八六〇〜一八六二に発表された、ドストエフスキー自身の獄中記録ともいえる。思想犯として逮捕され、死刑を宣告されながら、刑の執行直前に恩赦によりシベリア流刑に処せられた著者の、四年間にわたる貴重な獄中の体験と見聞の記録とのこと。

金芝河^{キムジハ}は、韓国の詩人、思想家である。韓国の独裁政権に対抗した社会運動家として知られ、長篇詩「五賊」（財閥、国会議員、高級公務員、將軍、長官次官のこと）を発表して逮捕されたり、以降も詩を発表して国立結核療養院へ強制軟禁されるなど、逃亡と逮捕を繰り返すことになった。

ここまで書いてきて、評者はだいぶ苦しくなった。これらを読んでいないというだけでなく、向き合うことがつらくなってきたのだ。あとの評は読者に任せるしかない。

金大中は一九七三年、東京で韓国情報機関に拉致され、後に韓国第十五代大統領になった人。『徐兄弟 獄中からの手紙』は一九八一年、岩波新書として刊行された。日本に生まれ育った二人の韓国人が一九七一年、祖国留学中に突然「北のスパイ」として逮捕された。弟の徐俊植氏は八八年、兄の徐勝氏は九〇年によく釈放されたが、彼らの獄中の日々を支えたものは何かを明らかにする。プーチン政権への批判を続けた反体制派の指導者ナワリヌイは、二〇二四年、ロシアの北極圏にある刑務所で死亡した。これらの著作に向き合う作者の強靱な精神に脱帽する。

小米雪のごとき字並ぶ大中^{デジン}の手紙

徐兄弟の末弟逝くや青木の実

「屈しない」ナワリヌイの声冬銀河

3・11消防士らの勲なお（『孤塁』より）

●セルフケアの詩型と短歌を謂ふ記事に深く頷く短歌との歲月

梅津純子

短歌と関わってきた長い年月を「セルフケアの詩型」という言葉で納得する作者。セルフケアは、もともと病気やストレスから回復するための自己管理を指していたが、さらに心の安定や生活の質を高めるための重要な手段として認識されるようになったとのこと。短歌でよくいわれる慰藉^{いしや}より

も、積極的な意味である。

哀しみの限りなき世を己が生を紡ぐ言の葉六四〇首

生き難さや困難に直面したとき、そこには言葉があった。短歌によって救われた自分をようやく振り返ることができた。最後に置かれた一首にある、歌集『風の旅』『白き川』の歌群は、その集大成であった。

一方、次のような歌もいい。

車蔽ふ雪を手袋の手に拭ふ二時間ほどの歌会を終へて

ブラシもて車の雪を払ひくれし友が突然激しく転ぶ

雪の下の落差に躓き倒れたるに「大丈夫」と友は運転し去る

雪国に住んでいる者にはよくわかる場面である。淡々と表現しているものの、すってんころりんと転んだ友人の格好が見えるようだ。しかしその友人は意に介さず、すかさず自分の車を運転して去っていった。転んで痛くなかったのかと気にかかるが、気をつけていても雪に滑ることはよくあることで慣れているのかもしれない。三首ともリズム感があり、面白く読んだ。



◆郭公の声——六月三日、薄曇りの蒸し暑い午後今年初めてカッコウの声を聞いた。あの空間に沁みいるような余韻のある鳴き声ではなく、思わず聴き耳を立てるような弱弱しい声は三度だけだった。今年のつがいはいまよくいったのだろうか。閑古鳥と言う夏の季語の鳴き声は、呼子鳥、春告げ鳥、豆撒き鳥ともいい歓迎されてきた。中国やヨーロッパでも同じような伝えがあるのと。托卵という郭公の一見恐ろしい習性は、体温の保持能力が低く外気に拠る変動が激しいので、卵を無事に孵すためではないかといわれている。ああもう今年は、あの懐かしい声を聞けないのだろうか。そろそろ不如帰も鳴く頃だ。

梅津純子

◆久しぶりの出会いが多かった春、「あら〜っ！」と何度発したことか。中学時の部活の顧問の先生とは五十数年ぶり、高校生のときの親友とは半世紀ぶり。二十年ほど前の担任学年の保護者とも。彼女からの誘いで、不適應やひきこもっている方々（当面は小・中・高生）の居場所づくり立ち上げのお手伝いを始めたが、自分こそ精神的ひきこもりと認めている。

大橋千佳子

◆朝は歩きにでることが日課になっている。歩き仲間にもあう日、あわない日がある。多く公園の周回路であう、名を知らず、おおよそどの町内にすむかする人たちだ。この間、セネガルやスリランカ、ブラジル、ボリビアの人ともあう。なかでボリビアの人とはよくあうので、あうとお喋りをする。彼は、毎朝小学校の周囲を4周しているのだ。この正月には、彼のスマホを通して、ボリビアのお母さんに挨拶をした。後日、同じようにお兄さんを紹介してくれたが、こちらが気づいていないのに、太っていることの断りのようなことに、ボリビアでは8割の人が太ってる、と云う。週末にパーティーがあり、よく食べるのだという。ところで、セネガルのその若者もセネガルがどこにあるか知らないでしょ、というので、当てずっぽうにアフリカを手で地図にして、西海岸あたりを指さしてみた。モリタニアなら（イナゴの話を読んだから）しってる、と云ったら、そのすぐ下だという。ボリビアの彼は、ボリビアは南米の心臓だという。これは中心にあるということらしい。国もどこにあるか、ということから（になる）。大きな祭がNHKでニュースになっていた（ボリビア）、その祭の話、あと一通り（国の）歴史を説明してくれたが、くわしくはネットですらべて、と云う。そのおり、戦争で海をうしなったなど、周辺国にそれぞれ領土の一部をとられたいきさつをきいていたが、じぶんの出身の群馬も今すむ埼玉も海なし県なので、海をうしなったこと、周囲に接して多くの国があるという感覚がどうなのか、少し同情もある。

小野澤繁雄

◆我が家はフルーツライン左沢線あてらざわの終着左沢駅にほど近く、毎日ガスカ（気動車）を眺めながら生活している。当地は今サクランボの季節となり記念イベントのためと思われる見たことのないガスカが頻繁に入線している。調べてみたらHBE300系「ひなび（陽旅）」という車両だった。左沢線はご多分に漏れず赤字ローカル線の典型みたいな路線である。サクランボ目当てでも何でもいいから利用する人が少しでも増えてくれれば本当にありがたいと思う。

「緑風や遊ぶパン屋の風見鶏」

神村ふじを

◆五月中旬、久しぶりで会った友人たちと山菜を食べる会をして、大いに飲み語った。二日後咳が出て熱っぽかったので医者に行ってみた。そしたらコロナだった。四人のうち三人が陽性になるのに読めずにいた『亜鉛の少年たち アフガン帰還兵の証言』を一気に読了した。これ以上残酷な証言はないというものばかりで、具合の悪い身体には堪えるだろうと予想の上で。スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチの大作は私にとってこれで四冊目になる。やはり衝撃が大き過ぎる。受け止め切れない。これを言葉で表してみるしか対処の方法がなかった。それで「展景」の原稿はまたまた読書感想句になった次第である。コロナに罹って今日で十二日目。痰がからむ、口の中がネバネバする、異臭がする、何を食べてもまずい、胃腸がよく働かない、頭痛がするなどの症状が

ある。母親にも仕事仲間にも簡単にうつしてしまった。何とも面倒な感染症だな。皆さん、罹らないように気を付けて。

新野祐子

◆春から夏にかけて土に触れる機会がふえた。畑の草は刈り取って「草マルチ」として野菜の株元に敷く。しかし、家の前の砂利に生える草は抜くか鋏で切るか（ドクダミはそつと鋏で切るほうが増えないという）、調理に使った熱湯をかけたりする。それでも追いつかない。ところが、まったく雨が降らないのでドクダミの葉が赤茶けてきた。そんなのは初めてだ。畑の野菜も、本来なら草マルチによって水の蒸発を防いでいるはずだが、水分が足りないせいだろう、皮が固かったり曲がったりしている。小さな畑でさえこうなのだから農家は大変だろうと思う。これから野菜は値上がりするに違いない。ほんとうに雨乞いが必要なレベルなのである。とはいえ、裏の畑から採ってきたばかりのトマトやナスの味は格別だ。いまのところズッキーニも健闘していて、糠漬けにも合うことがわかった。自家菜園はありがたい。

◆あるとき小屋のそばのヤブガラシが大きくなってのを見つけて引き抜こうとしたら、手袋の上から二カ所ハチに刺された。アシナガバチだ。近くに蜂の巣があったらしい。とつさに薬！と思ったが、最近購入した器具がいいだろうというので、「熱×振動・蚊虫対策器」を刺された箇所当ててみた。何回か繰り返しているうちに赤みがなくなり、治ったようだった。次の日も、刺さ

れた箇所に残っているだけ。よかったー。この器具は、熱と振動によって蚊に刺されて注入された唾液タンパク質を破壊するというもの。蚊や虫に弱い人におすすめです。リンクは左記のとおり。

<https://amzn.asia/d/e4SGKtK>

（布宮慈子）

muninokai.com

113号より上記サイトのオンライン版発行のみとなっています。

季刊 展景
118号

二〇二五年七月三十日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形県西村山郡河北町谷地庚79

info@muninokai.com

Copyright © 2025 MUNINOKAI. All rights reserved.